

私の“収穫”

いま、再び「都市へ」

東秀紀 作家・NKK 総合都市開発事業部次長

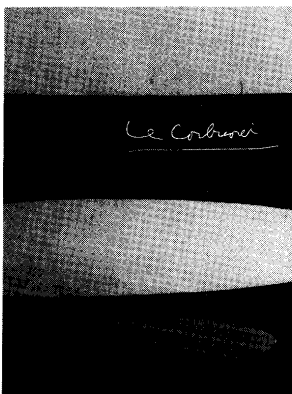
もはやあと数年を残すばかりとなった20世紀において、最も影響力のあった建築家・都市計画家がル・コルビュジエであったことを、誰も否定することはできないだろう。彼のインパクトをどう受け止めるかが最大の問題であった時代は、戦後かなりの期間続いた。

新見隆・小田るな・太田泰人・林美佐ほかによる『「ル・コルビュジエ展」カタログ』は、昨年末から今年初めにかけて、わが国で行われた展覧会のもので、内容的にも充実しており、この建築家の真実の姿を伝えている。あたかも泰西名画集をつくるような編集にも、私のようなモダニズム偏重の教育を受けた世代からすると、隔世の観が深い。逆に神格化されたコルビュジエの建築が、実はとても温かく人間的であったことに驚く人も多いだろう。

ところで都市計画はコルビュジエが夢みたように、一人の芸術家が行うことはできず、市民たちの合意で進めていかなければならない。その中で行政プランナーとして先駆的役割を果たしたのが田村明氏である。著書『美しい都市景観をつくる アーバンデザイン』（朝日新聞社、1997年）は、テーマをアーバンデザインに絞り、氏の業績が絶えざる創意と工夫の賜物であったことを、あらためて教えてくれる。

最後に、林望氏の『ホルムヘッドの謎』は、今人気絶頂のリンボウ先生によるイギリスに関するエッセイであり、一見非効率に見えるイギリスのロータリーや歩道にも、実はかの国のゆったりとした、他人への思いやりが生きている、と見抜くところに著者の鋭い眼識が感じられる。

バブル経済の崩壊以後、都市計画が真面目に語られなくなって久しいが、なおも人間的な都市づくりへの努力は続けられなければならないとの視点から、以上三冊を選ばせていただいた。



毎日新聞社、1996年



文藝春秋、1992年

建築の記憶をつなぐ

在塚礼子 埼玉大学助教授

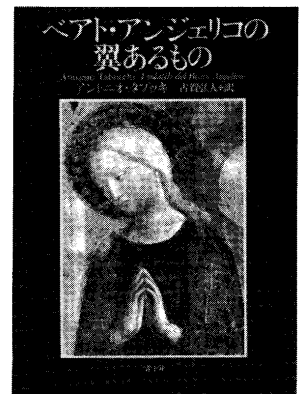
1990年代に入ってから、これという本に出会っていない気がする。これは多分、自分のせいで、探す力と受けとめる力がともに衰退しているのだ。それでも、まず、ヘルマン・ヘルツベルハーの『都市と建築のパブリックスペース』（森島清太訳）。1975年に初めて訪ねたアムステルダム郊外の高齢者施設。その建築を見、それを語る言葉を読んだその日、私はひとりの建築家の中に存在する「建築計画」が初めて見えたと思った。それが明らかにされたのが、建築を学ぶ人のために1991年に書かれたこの本。建築に呼応する人々の姿を温かくとらえる眼差しと、建築を構成する明晰な方法がやはりとてもいい。

建築を専門に学ぶ人のためだけでなく、ジェイ・ファースタイン、ミン・カントロウイツの『場所との対話』（高橋鷹志訳：TOTO出版、1991年）は、建築とかわかって生活する人々のためのユニークなテキストとなる。空間と人間の関係を実感してもらうため、「好きな場所、嫌いな場所」「記憶に残る場所」といった章の実習を学生にすすめる。原本は1978年の発行で、このころから私も老人に住まいの記憶を問いはじめたのだが、うまくいっているとはいえない。この本にも答えはでていない。そこがまたいいというテキスト。

三冊めは、建築の本とはいえないけれども、最近一番好きなアントニオ・タブッキの本『ベアト・アンジェリコの翼あるもの』（古賀弘人訳）。ヘルツベルハーの建築を訪ねた10日ほど後。1975年初冬のフィレンツェ。F. アンジェリコの『受胎告知』は、修道院に並ぶアーチ天井をもつ小さな個室のひとつに、アーチ型の小さな窓と同じ形に描かれていた。タブッキが表現したのは、その壁画が描かれた時代の、建築と絵画だけでなく、人の生活と精神と精霊とがすべてひとつであった世界。その美しさを限りなく想像させてくれる言葉を、みごとな翻訳が静かに伝えている。



鹿島出版会、1995年



青土社、1996年